

治療薬学特別講義		選択	通年	1単位
担当研究分野	薬理学、薬物治療学、医療薬学、行動可塑制御、機能形態学、生体分子薬理学、分子生物学、運動科学			
到達目標・目的	薬学において治療に根ざした薬を開発するには、その病態を分子レベルから統合的に理解し、かつ明らかにする必要がある。そこで、本領域では、現在、問題視されている生活習慣病、免疫疾患、慢性疼痛、老化およびがんなどの生理・病態を学び、それらの治療法・薬物療法のアプローチを理解し、新たな治療法の確立を目指すことのできる研究者を育成することを目標とする。			
受講心得・準備学習等	講義・演習に積極的に参加し、課題については予め調査し、演習においては、自分の見解を述べるようにすること。			
事後学習・復習等	各研究分野における物事の捉え方を学び、自分自身の研究との関連性について考察すること。			

### 授業の方法と各回の内容

授業の方法		講義・演習
時間	研究分野	講義・演習 内容
115分	薬理学	難治性疾患による細胞の劣化を分子レベルで解説し、その知識を基盤として解剖機能学的に準じ、ネットワーク・フェノミクス解析を行い、既存の病態評価の適正を判断すること及び病態メカニズムを理解し、難治性疾患の新しい治療戦略等について論じる。
115分	薬物治療学	肥満や糖尿病をはじめとした生活習慣病の成因や病態、さらには代謝性疾患が中枢神経に及ぼす影響など最近の話題と新たな治療法の可能性について論じる。
115分	医療薬学	分子標的によるがんの治療について、放射線内用療法や抗体医薬品によるドラッグデリバリーの手法について解説し、最近の治療の動向と新たな治療法の可能性について論じる。
115分	行動可塑制御	精神疾患の多くは、神経細胞の可塑的变化に伴って生じることが知られている。こうした神経可塑的变化が引き起こされた際の細胞内変容ならびに行動変容について、神経伝達、細胞小器官あるいはタンパク質制御の視点から論じる。
115分	機能形態学	生活習慣病やメタボリックシンドロームの発症機構および様々な合併症の発症機構について解説し、肥満のメカニズムや脂肪細胞に関する基礎的研究について論じる。
115分	生体分子薬理学	漢方薬、機能性食品、化粧品に関する最新の話題を紹介し、それらが生体に及ぼす作用の分子メカニズムに焦点を当てながら、疾患に対する新たな予防法や治療法の可能性について論じる。
115分	分子生物学	アレルギー標的臓器の過敏性形成メカニズムについて、その分子機構を理解し、新規アレルギー疾患治療戦略の可能性について論じる。
115分	運動科学	近年に同定された新規 GPCR リガンドを機能形態学的に解説する。また統合医療としてのメディカルアロマセラピーや運動療法の効果を分子レベルから紹介する。

成績評価の方法	それぞれの研究分野においては、ディスカッションまたは発表内容等について複数の教員で評価するが、必要に応じてレポートを課す。 各研究分野からの評価を総合し、判定する。
成績評価の基準	ディスカッションへの取り組み方、課題に対する準備等を総合的に評価する。
教科書	なし（必要な資料を配付する。）

参考書など	
その他	

※上記内容は、一部変更となる可能性があります。